

6/30
10時(9)
p3

須磨海浜水族園 亀崎園長の

あっぱれ!

水の動物たち



人間は社会という言葉を多用する。しかし、社会とはなんぞや、と問うてみると、これはなかなか答えづらい。人間が集合してつくり上げた生活圏のようなものをイメージしてしまう。動物学にも社会という用語がある。かつては、動物に社会なんてあるもんか、と動物社会を否定する研究者もいたが、今ではさまざまな動物の社会が研究され、動物が集団をいかにうまく運営しているかということを議論している。

社会性

女王と兵隊 分業するエビ

真社会性を持つエビ(シリアルフェウス・レガリス)。中央のタマゴを持った個体が女王エビ。周りにははさまの大きな雄のエビが女王を守っている



須磨海浜水族園でもさまざまな動物の社会を見ることが出来る。マイワシは群れをつくり、チチブというハゼに似た魚は水底になわばりを形成している。これらは、他の個体を何らかの形で意識した行動であり、社会があるとみなすことができる。ところが社会性が希薄な動物もいる。例えば、カメである。須磨海浜水族園に昨年できた亀楽園という施設では、野生から駆除されたアカミミガメが数百匹飼育されており、ちょっとした人気コーナーになっている。カメの行動の特徴は相互に干渉しあわないことである。オスはたまにメスの前で求愛行動をしているが、それ以外はまったく互いに干渉しない。カメは社会性が欠如した動物なのである。

一方、日本人のリーダーは頼りないというのが、今や世間の常識となりつつあるが、動物の社会にも「リーダー制」がある。仲間の中でうまく賢く生きる個体がいる場合、他の個体はその個体をリーダーとしてついていくようになる。その方が集団としてうまく生きていけるからだ。それがリーダー制である。奈良公園のシカはそんな社会を持っている。リーダーを中心としてまとまり、統率されたグループで生活するのである。永田町のシカたちは自ら選出したリーダーのあとをついていかないうちで、その段階でリーダー制は倒壊しているのであろう。

◇神戸賞授賞式と記念講演会

ダフィー博士への授賞式と講演会は7月10日午後2時から、神戸市中央区のホテルオークラ神戸1階「松風の間」で行

われる。参加費無料。講演会は通訳つき。

参加希望者は須磨海浜水族園（電話078・731・7301）まで。申し込みは7月3日まで。定員になり次第締め切る。

実はリーダー制が進化すると、分業制が発達する。つまり、仕事を部下に義務づけて集団がより有利に生きていくように振る舞うのである。何となく社会主義である。動物には社会主義をもっと進化させたものがある。ハチやアリである。彼らは子供を作ることも分業制にしてしまい、子供を作る女王と、働いたり、闘ったりするだけの個体が存在する集団を形成したのである。これを真社会性と呼ぶ。

この超集団重視主義。つまり真社会性の動物だが、これまでハチやアリなど陸上の動物でしか知られていなかった。ところが、アメリカ・バージニア海洋科学研究所のエミット・ダフィー博士がカリブ海の海で見つけたのは、真社会性のエビである。このエビ学名はシリアルフェウス・レガリスというが、日本名はまだついていない。テッポウエビの仲間だ。このエビ、カイメンという動物の中に巣を掘って、そこにすんでいる。カイメンとは英語でスポンジ。一抱えもある大きなカイメンもある。この正に海绵質の生物体に穴を掘って、そこに女王エビを中心にそれを守る兵隊エビが何十匹も生きているというのである。



▶シリアルフェウス・レガリスの女王エビ。けんかをしないので、はさまは小さくなっている

▲兵隊エビ。カイメンの周囲中にいる女王を守っている。けんかをするので、はさまは大きい

須磨海浜水族園では世界の海洋生物学者で顕著な研究をした研究者を選んで、表彰するとともに、市民にその面白さを語ってもらおうということで、「神戸賞」を創設した。その栄えある第1回の受賞者がこのエビの社会を発見したダフィー博士なのである。このダフィー博士の講演会が7月10日に行われる。ぜひ、聴講してもらいたい。また、必死の思いで、このエビを入手し、須磨海浜水族園で近いうちに一般公開する予定だ。エビをみながら社会のありかたを考えるのも一興だと思っただけ……。 二次回は7月28日

亀崎直樹(かめざき・なおき)

1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園園長。東京大学大学院農学生命科学研究科客員准教授、NPO法人日本ウミガメ協議会会長を兼務。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。